■第Ⅱ部　基本構想

【第1章】　まちづくりの基本理念と将来像

第1節　まちづくりの基本理念

まちづくりの基本理念は、本市のまちづくりを進めていくうえで、行政と市民一人ひとりがそれぞれの立場で大切にしなければならない考え方、心構えを示したものです。

新市建設計画では、新市の将来を担う「人づくり」に重点を置く必要があるとの認識のもと、「人」にまつわる４つの基本理念を掲げました。

また、まちづくり住民会議（100人委員会）では、分野別・テーマ別に開催した各委員会において本市が目指すべき方向性をそれぞれ検討いただき、市民の思いが表現された様々なキーワードが出されましたが、中でも「人材」「一人ひとり」「市民」「誰でも」など「人」に関係する言葉が数多く寄せられました。

このため、本計画においても「人」をまちづくりの原点としてとらえ、新市建設計画に掲げた以下の基本理念を継承することとします。

1. 育成：人を育てる

人材育成は、すべての基礎となることを認識し、百年の大計を見据えて取り組みます。生命や公共の精神を尊ぶという基本的な教育を出発点におき、豊かな人間性と創造性を備えた人材の育成を図りながら、産業をはじめ福祉、文化など、それぞれの分野で自らの個性を活かして活躍する人づくりを進めます。

また、ものづくりなど、地域に根ざした本市固有の技術や歴史などに関する教育を進める一方、人をいたわり尊重する心の教育も重視して、バランスのとれた人づくりを進めます。

2. 参画：人を活かす

地域における人づくりにおいては、地域への関心や愛着を高めながら、地域社会の活動やまちづくりに積極的に参画する意識をともに育みます。そして、まちづくりや産業振興のさまざまな場面において、住民参画の機会をつくり、優れた人材の活用を図ります。

こうした参画により、地域社会がよくなっていくとともに、参画するその人自身のさらなる成長ももたらされます。

3. 交流：人がふれあう

合併した本市において大切なことは、住民同士のふれあいを深め、一体感を醸成することです。そこで、市内の行き来を活発にする道づくりやしくみづくりを進めます。

また、市民が一体感を持てるようなまつり、スポーツ、文化などの活動を盛んにします。一方、一体感を持つための条件として、地域間格差のない均衡ある発展を目指します。

4. 協力：人が助け合う

本市においては、市民全員がお互いに尊重しあう心を大切にし、困った時の助け合いの精神を醸成しながら、福祉の充実したまちづくりを進め、人に優しいまちを実現します。

また、行政側では、まちづくりに対して、より多くの市民の意見を反映するしくみづくりを進めるとともに、ものづくりやその他の産業面においても、企業や人の交流・連携・協働を進め、新しい分野に挑戦していける環境づくりを進めます。

第2節　燕市の将来像

人と自然と産業が調和し、進化する燕市

＜将来像に込められた意味＞

本市は、広大な新潟平野にあって、西に国上山を臨み、東部を信濃川や中ノ口川、西部を大河津分水路が緩やかに流れる、風光明媚で美しい自然に恵まれた地域です。

本市の沿革をたどると、江戸時代後期の名僧・良寛が諸国行脚の末、国上山を定住の地とし、人と自然を愛した良寛の思想や生き方は、現代でも思慕の念を持って多くの人々に受け入れられています。また、良寛の慈愛の心を受け継いだ私塾「長善館」は、幕末から明治にかけて、進取の精神を抱いた若く有能な人材を数多く輩出しました。

また、大河津分水路は、洪水に苦しめられてきた先人たちが氾濫する信濃川を治めるため、当時の土木技術の粋を集めて切り拓いた放水路で、本市を含む信濃川下流域の発展を支えるとともに、雄大な河川景観を提供している一大治水施設であり、人と自然が造り出した歴史的、文化的な産物といえます。

一方、産業においては、江戸時代の和釘に端を発して発達した銅器、ヤスリ、キセル、矢立などの生産は、時代の変遷により淘汰されてきました。しかし、その技術を活かして、そのたびに不屈の精神で新たな活路を見いだし、金属洋食器、金属ハウスウェアをはじめとする世界に誇る金属加工技術を生み出し、現在も画期的な創造力で新分野への業種転換、多角化が行われており、本市のものづくりの伝統は特筆すべき力強さを備えています。

これら本市をかたちづくる「人」「自然」「産業」がそれぞれに「調和」するとともに、時代に対応して「進化」していくことにより、将来にわたってより一層の発展を目指していきます。